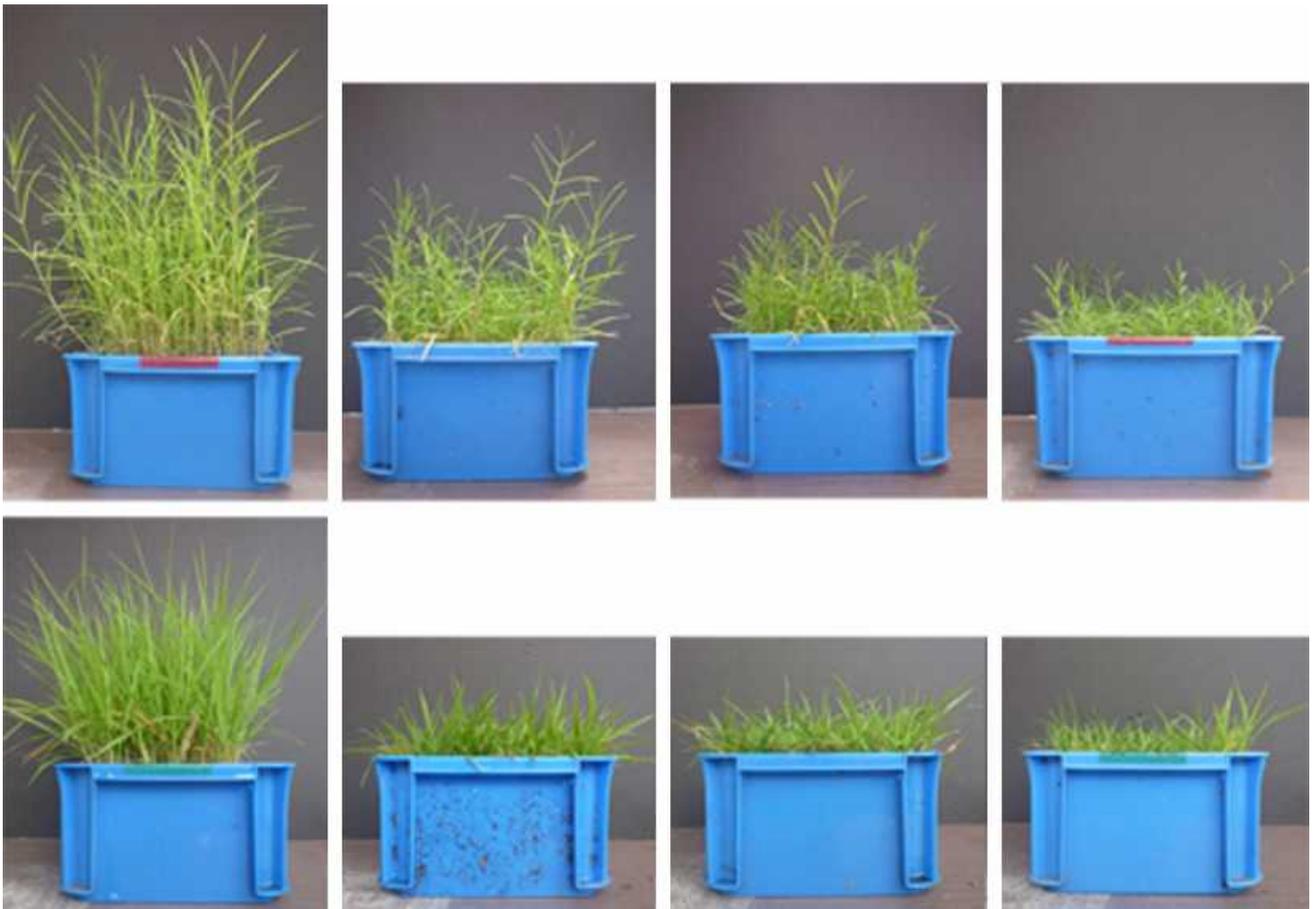


# 植物個体の環境応答

環境科学コース 酒井 敦



毎日踏みつける回数を変えて育てたバミューダグラス(上)とノシバ(下)。それぞれ、左から踏圧処理0回/日、1回/日、4回/日、8回/日。踏みつけの頻度が高いほど、小型化しているが、小型化している植物の方が葉の窒素含量が高く、光合成能力も高くなる。

植物は、生態系の中で他の生物に食料や住処を提供するとともに、他の生物をはじめとする様々な環境因子の影響を受けて生きています。私たちは「化学物質を介した植物間相互作用(他感作用)」、「ササとシカ」、「タバコと病原菌」、「マングローブとカニ」といった生物間相互作用や、「冬季における葉の赤色化」といった身近な現象を題材に、植物の環境応答の仕組みと意味を調べています。

キーワード：他感作用、接触形態形成、光合成、過敏感細胞死、葉の赤色化